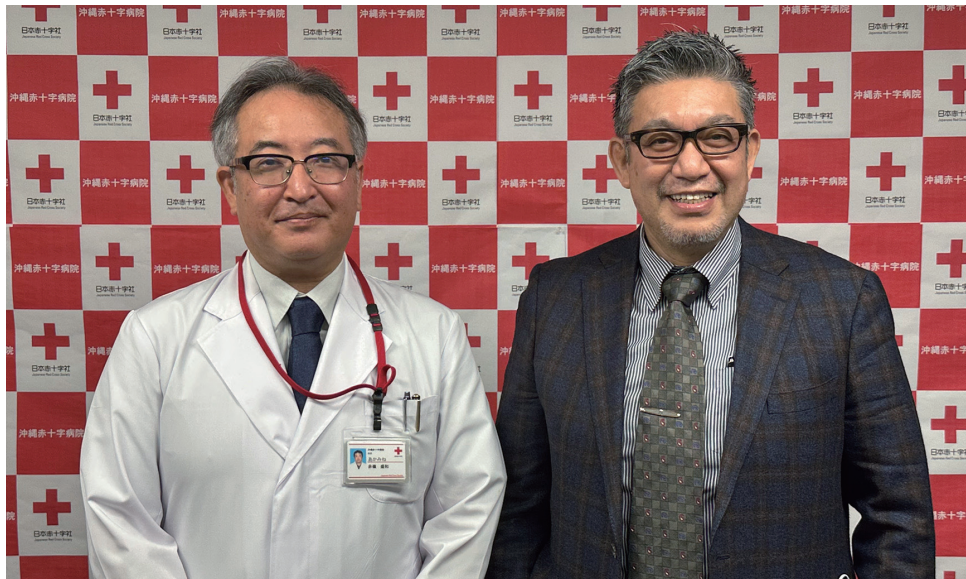


沖縄赤十字病院 院長 赤嶺盛和 先生



間仁田先生> 先生は、2024年4月から沖縄赤十字病院 院長にご就任されております。遅ればせながらご就任おめでとうございます。

2024年4月に院長に就任されてから約2年が経過しましたが、この間を振り返って印象的な出来事や現在の課題、今後の展望についてお聞かせください。

赤嶺先生> ありがとうございます。

院長に就任したのは2024年4月でしたが、それ以前は副院長として病院運営に携わっておりました。就任直後の大きな出来事として、同年6月に病院機能評価を控えていたことが挙げられます。院長として初めて迎える重要な節目であり、それまでとは異なる責任の重さを強く感じました。立場が変わることで病院全体の状況や課題の見え方も大きく変わり、プレッシャーを感じる一方で、急性期病院としての理念や使命について改めて深く考える貴重な機会となり

ました。この経験を通じて、安全で質の高い医療を継続的に提供するためには、日々の改善活動を積み重ねていくことの重要性を改めて認識いたしました。

また、感染症対策への対応も大きな課題でした。私は感染症分野に携わり、これまで現場のプレイングマネージャーとして新型コロナウイルス対策に取り組んできましたが、その影響は病院全体に及び、職員の疲弊や人員不足など深刻な状況が続いていました。特に看護師不足の影響は大きく、2024年9月には一般病棟（54床）を一時休止せざるを得ない状況となりました。病棟休止は大きな決断であり、不安もありましたが、地域医療構想や今後の医療ニーズを踏まえ、病院としての役割を改めて見直す契機となりました。

その結果、地域の医療機関や関係者との協議を重ね、2025年10月には地域包括ケア病棟（39床）として再編・再開することができました。これまで同様急性期医療を中心に引き続き

担っていく方針ですが、新たに回復期・在宅復帰支援の機能を強化することは大きな転換点でした。急性期治療を終えた患者さんが安心して在宅復帰できるよう支援する体制を整え、訪問診療や地域の医療機関との連携を一層強化しています。地域の中で当院が果たすべき役割を改めて明確にし、地域医療に貢献できる体制づくりを進めているところです。

経営面においては依然として厳しい状況が続いておりますが、病棟の再編・再開を1年以内の実現できたことは大きな成果であり、今後の病院運営の基盤強化につながるものと考えています。今後は、この新たな体制をさらに充実させ、地域のニーズに応える医療を提供していくとともに、持続可能な病院運営の実現に向けて取り組んでまいります。

さらに、今回の病院機能評価を通じて特に印象的であったのは、「患者の尊厳を守る医療」の重要性がより強く求められている点でした。具体的には、ACP（アドバンス・ケア・プランニング）を支援する体制の整備や、身体拘束の適正化に向けた取り組みなど、患者中心の医療を実現するための活動がより重視されています。これらは医療の質の向上とともに、社会から求められる医療のあり方が進化していることを示しており、病院として継続的に取り組むべき重要な課題であると認識しております。

病院機能評価は準備や対応に大きな労力を要しますが、その過程は病院全体の医療の質を見直し、改善する貴重な機会でもあります。このような取り組みを通じて、病院は着実に前進していくものと感じております。今後も、患者さんに安心して医療を受けていただける体制の構築を目指し、職員一同努力を重ねてまいります。

間仁田先生> 現在、多くの病院が経営や人材確保など様々な課題に直面していますが、先生が目指しておられる病院運営の方向性についてお聞かせください。

赤嶺先生> 院長に就任してから、当院の歴史を改めて振り返る機会がありました。当院は



1952年11月に「厚生協会診療所」として診療を開始したことに始まります。当時は戦後間もない混乱期であり、貧困や災害に苦しむ地域住民を支援することを目的として設立された経緯があります。地域の方々の強い思いによって築かれてきた病院であることを改めて認識し、地域に支えられてきた病院として、これからも地域住民の皆様信頼され、愛される存在であり続けることが私の使命であると考えております。

その実現に向けて、現在は大きく三つの柱を意識して病院運営に取り組んでいます。

第一は、「患者中心の医療の徹底」です。医療の高度化が進む一方で、高齢化や独居世帯の増加により、不安や孤独を抱える患者さんは決して少なくありません。そのような中で、単に医療を提供するだけでなく、「この病院に来てよかった」と感じていただける温かみのある医療を提供することが重要であると考えています。現在、ACP（アドバンス・ケア・プランニング）を支援する倫理コンサルテーションチームの活動や、身体拘束ゼロを目指した多職種連携による取り組みを進めており、患者さんの尊厳を守る医療の実現に努めています。地域の中核病院として、医療を通じて地域社会に貢献していくことが重要な役割であると考えております。

第二は、「職員が安心して働き、誇りを持つ職場環境の整備」です。質の高い医療を提供するためには、職員一人ひとりがやりがいを持ち、安心して働ける環境が不可欠です。そのため、ハラスメント防止対策の強化や相談体制の整備など、職員を守るための仕組みづくりを進

めています。また、電子カルテの更新をはじめとするDXの推進や、スマートフォンとの連携などによる業務効率化を図り、職員の負担軽減にも取り組んでいます。さらに、タスクシフトやタスクシェアの推進により、多職種が連携しながら効率的に医療を提供できる体制づくりを進めています。

第三は、「人材育成と次世代を担う医師の育成」です。当院は臨床研修指定病院として初期研修医の育成にも力を入れてきました。私が入職した2008年当時は研修医が少ない状況でしたが、現在では11名の研修医を受け入れる体制が整い、着実に教育環境が充実してきています。また、日赤グループ病院との連携により、県外の医療機関での研修機会も設けています。熊本、群馬の前橋日赤など救急、集中治療を中心とする研修、慢性期の医療機関に加え、昨年度からは北海道の医療機関とも連携し、地域医療を学ぶ機会を提供しています。異なる地域や環境での研修経験は、若い医師にとって大きな財産となり、将来の地域医療を支える人材の育成につながるものと考えています。

このように、患者さんを中心とした医療の実践、職員が働きやすい環境づくり、そして次世代を担う人材の育成という三つの柱を軸に、地域に信頼される病院づくりを進めていきたいと考えています。厳しい経営環境が続いておりますが、地域医療を支える重要な役割を担う病院としての責任を果たしながら、持続可能で質の高い安心・安全な医療の提供を目指してまいります。

若手医師が外部の医療機関で研鑽を積んでいくことは、本人にとっても病院としての力を高めるうえでも非常に重要であると考えております。実際に、集中治療・救急分野の研修のため関東で研修を行った医師は、現在も救急医療の最前線に身を置き、日々研鑽を積んでおります。こうした研修は、当院のみでは得ることのできない経験を積む貴重な機会となっており、医師個人の成長のみならず、将来的には当院の医療体制の充実にもつながるものと期待しております。

私自身が当院に赴任してから17年が経過し



ましたが、当初は研修機会も限られておりました。それが現在では、複数の若手医師が各専門領域で研修を重ねており、今後5年、10年といった中長期的な視点で、専門性を備えた医師が地域に根付き、医療の質の向上に寄与していくことが期待されます。その中で後々当院に戻ってきてくれる医師がでてきてくれて、活躍してくれることを願っています。若手医師が戻ってくることで、さらに新たな人材を呼び込む好循環が生まれるものと考えております。

実際に、初期研修の充実が医学生や若手医師の関心を引き、結果として人材確保につながっていることを実感しております。時代の流れとともに世代交代が進み、医療を取り巻く環境も変化しておりますが、若い世代にとって魅力ある研修環境を整備することが、今後の地域医療を支えるうえで極めて重要であると考えております。

また、今後の重要な柱の一つとして、地域連携のさらなる強化が挙げられます。救急医療を担う基幹病院として、地域の診療所や他医療機関との連携を一層推進し、それぞれの役割を明確にしながら協力体制を構築することが求められております。こうした取り組みを通じて、地域全体で医療を支える体制を強化し、住民の皆様が安心して医療を受けていただける環境づくりに努めてまいりたいと考えております。

間仁田先生> 医療機関の経営が厳しさを増し、医師、とくに看護師不足が顕在化する中、急性期医療の中核病院として、24時間365日救急体制を維持されており、大変なご苦労があ

るかと思いますが、現状と今後の課題等がありましたらお聞かせいただけますか。

赤嶺先生> 今後、人材面や経営面を含めて、一定の改善への期待は持っておりますが、医療を取り巻く環境は依然として厳しく、経営状況が短期間で大きく好転するものではないと認識しております。特に看護師不足をはじめとする医療従事者の確保は重要な課題であり、救急医療体制の維持においても大きな影響を及ぼしております。

そのような中、当院では可能な限り救急搬送の受け入れを行い、地域の医療機関からのご紹介にも応えられるよう努めております。しかしながら、各医療機関が懸命に対応する一方で、現場の疲弊が進むことも現実の課題であり、持続可能な医療提供体制を構築するための対策が求められております。

特に、診療科の専門性だけでは対応が難しい総合診療的な症例においては、個々の医師や診療科のみで完結することが困難な場合も多く、院内外の医師同士の連携を強化し、組織として対応していくことが不可欠です。当院としても、紹介患者を可能な限り断らずに受け入れる努力を続けておりますが、患者さんにとって最適な医療を提供するためには、他の高度医療機関との適切な連携と役割分担も重要であると考えております。

実際に、高度な医療体制を有する医療機関との連携を図りながら、当院で対応可能な領域は責任を持って担い、専門的な対応が必要な場合には速やかに連携することで、地域全体として患者さんを支える体制の構築に努めております。すべての医療を一つの病院で完結させることは現実的に困難であり、それぞれの医療機関が役割を明確にし、相互に補完し合うことが重要であると考えております。

また、高齢化の進展に伴い、高齢者救急および高齢者医療の需要は今後さらに増加することが見込まれております。当院においても高齢患者の割合は増加しており、この分野への対応は地域医療を担う上で重要な使命の一つです。専

門性の高い医療の充実とともに、地域のニーズに応じた医療提供体制を整備し、当院が担うべき役割を着実に果たしていきたいと考えております。

そのためには、医療機関同士の横の連携をさらに強化し、限られた医療資源を有効に活用することが不可欠です。大学病院を含めた医療機関間の連携や、医師同士の協力体制の構築など、今後も継続して取り組むべき課題は多くありますが、沖縄県は医療機関同士の結びつきが強く、地域全体で課題に取り組む土壤があると感じております。

今後も関係機関との連携を一層深めながら、地域の医療を支える基幹病院としての役割を果たし、患者さんが安心して医療を受けられる体制の維持と向上に努めてまいりたいと考えております。

間仁田先生> 沖縄県医師会に対してのご意見・ご要望がございましたらお聞かせください。

赤嶺先生> 医師会には日頃より多大なるご支援をいただいております。大変感謝しております。当院は日本赤十字社の施設として活動しておりますが、日本赤十字社は来年創立150周年という大きな節目を迎えます。「苦しんでいる人を救いたい」という思いのもと、いかなる状況においても人の命と健康を守ることを使命として、人道的活動に取り組んでまいりました。

沖縄県において日本赤十字社は、沖縄県支部や血液センターとともに連携しながら、医療事業のみならず、国内災害救護や国際救援活動、血液事業、救急法等の赤十字講習会事業、赤十字奉仕団によるボランティア活動、青少年赤十字、看護師育成など幅広い活動に取り組んでおります。特に救急法、水上安全法、幼児安全法、健康生活支援講習などの赤十字講習会には、当院職員も指導員として積極的に関わっており、地域の安全・安心の確保に努めております。

また、当院は災害拠点病院として、県や関係機関と連携し、災害対応訓練や実際の災害時の医療支援にも取り組んでおります。こうした活

動は、日本赤十字社の重要な使命の一つであり、地域社会における医療機関としての役割を果たす上でも大変重要なものと考えております。

創立 150 周年という節目にあたり、日本赤十字社の人道的活動について、より多くの県民の皆様を知っていただきたいと願っております。また、一人ひとりが参加できる活動も数多くありますので、こうした人道活動への理解と支援の輪が沖縄県内でさらに広がっていくことを期待しております。

さらに、医師会長をはじめとする医師会の先生方には、病院間の連携強化や救急医療体制の整備、さらには病院経営に関する意見交換の場の提供など、さまざまな面でご尽力いただいております。心より感謝申し上げます。こうした連携のもと、地域医療を支える体制が着実に構築されていると感じております。

今後も医師会と連携を図りながら、日本赤十字社の使命を果たすとともに、地域の皆様に信頼される病院として、沖縄の地域医療の充実と発展に貢献してまいりたいと考えております。

間仁田先生> 先生の健康法やリフレッシュ方法について教えてください。

赤嶺先生> 私は小学校から大学までバレーボールを続けていました。さすがに今は試合に出ることは難しくなりましたが、一番下の子どもが小学校 6 年生で、時々一緒にパスをするなど、楽しみながら体を動かしています。無理をすると怪我の心配もあるため、現在は無理のない範囲で続けています。

また、自宅では愛犬のミニチュアダックスフンドとの散歩の時間などの触れ合いが日々の癒しになっています。こうした時間が気分転換にもなり、健康維持にもつながっていると感じています。

間仁田先生> 趣味についてはいかがですか。

赤嶺先生> 趣味ですが、これといって特別なものはまだ模索中です。最近はゴルフの練習



P R O F I L E

学歴・職歴

| | |
|--------------|-----------------------|
| 平成 10 年 3 月 | 琉球大学医学部卒業 |
| 平成 10 年 5 月 | 川崎市立川崎病院 (初期研修医) |
| 平成 12 年 4 月 | 琉球大学附属病院 (第一内科) |
| 平成 12 年 10 月 | 北部地区医師会病院 |
| 平成 17 年 3 月 | 琉球大学大学院医学研究科卒業 (博士課程) |
| 平成 17 年 4 月 | 琉球大学附属病院 (第一内科) |
| 平成 19 年 4 月 | 北部地区医師会病院 |
| 平成 20 年 4 月 | 沖縄赤十字病院 |
| 平成 22 年 4 月 | 沖縄赤十字病院 呼吸器内科部 副部長 |
| 平成 25 年 4 月 | 沖縄赤十字病院 呼吸器内科部 部長 |
| 平成 29 年 4 月 | 沖縄赤十字病院 副院長 |
| 令和 6 年 4 月 | 沖縄赤十字病院 院長 |

資格

日本内科学会総合内科専門医・指導医、日本呼吸器学会専門医・指導医、日本感染症学会専門医・指導医、日本プライマリケア連合学会認定医、日本癌治療学会認定医

場に行き始めたり、子どもと将棋を指したりと、少しずつ楽しみを見つけているところです。忙しい日々の中でも、無理のない範囲で続けられることを大切にしたいと思っています。

また、これまでのバレーボールを通じて多くの方と知り合うことができ、そのつながりは今でも大切な財産です。こうしたご縁は大変ありがたいものであり、続けてきてよかったと感じています。

間仁田先生> いいお話を聞かせていただきありがとうございます。

本日はお忙しい中、ありがとうございます。

インタビュアー：広報委員 間仁田 守